

「資質・能力の育成に向けた授業づくり3」―学びに向かう力、人間性等の指導と評価を軸に①―

資質・能力の育成と 学習評価の充実



京都大学大学院教育学研究科教授 西岡加名恵

I 「目標に準拠した評価」の 意義と課題

平成一三（二〇〇一）年の通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」で全面的に「目標に準拠した評価」が導入されてから、早くも二〇年が過ぎた。「目標に準拠した評価」には、指導の前に目標を明確にし、目標を規準として学習の実態を把握することによって、指導と学習、更にはカリキュラムや教育条件の改善につながる、それによって学力保障・学力向上を促進するという意義がある。しかしながら、学校現場に出掛けてみると、「目標

に準拠した評価」によって教師たちが過度に多忙化していたり、指導案に書かれてはいても実質的な評価が行われていないといった形骸化が生じていたりすることを目にする例が少なくない。また、「目標に準拠した評価」を生かして学校のカリキュラムや教育条件の改善につながるという発想も、一般的なものとはなっていない。

そこで、本稿では「資質・能力」を育成するために、「目標に準拠した評価」をどのように実践すればよいのかについて提案してみよう。

II 評価の機能を区別する

「目標に準拠した評価」を実践する場

合、事前に子供の実態を把握するための評価（診断的評価）、指導や学習の改善のために途中経過を把握する評価（形成的評価）、ある時点での到達状況を記録に残すための評価（総括的評価）という三つの機能を意識して取り組むことが重要である。実際には、三者の区別が行われていないために、四六時中、成績付けに追われていたり、指導が終わった後で成績付けに悩んだりする事態が生じている。

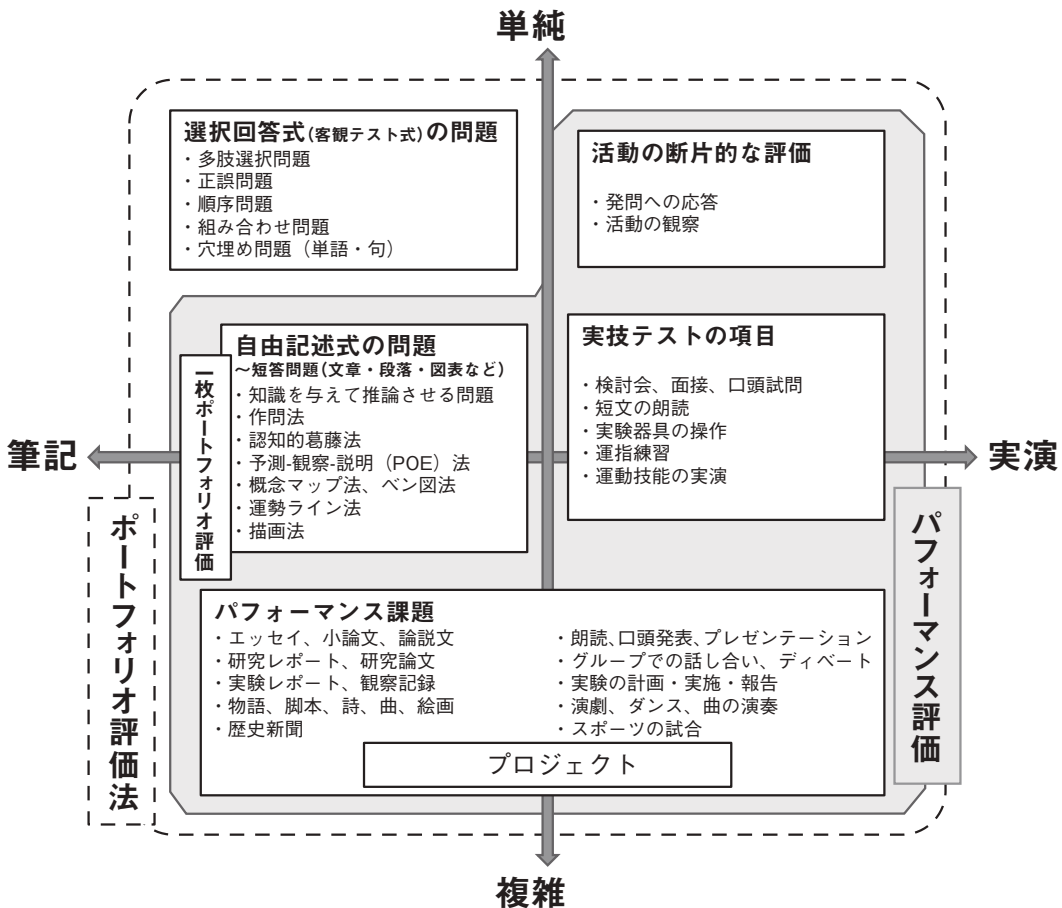
そこで各学校には、教科等の年間指導計画を立てる際に、年間評価計画も立てておくことを勧めたい。これは、①観点別学習状況の評価（以下、「観点別評価」とする）をどの単元で行うのか、②観点

別評価をどのように総合評定に変換するかを明確にするものである。

まず観点別評価については、一回の授業で三つの観点全てを評価しなくてはならないわけではない。「単元や題材などのまとまりごとに、それぞれの実現状況が把握できる段階で評価を行う」のが原則であり、「各教科等の目標や内容の特質に照らして、複数の単元や題材などにわたって長期的な視点で評価すること」も可能である^{注1}。

観点別評価から総合評定への変換ルールについては、多くの学校で、(a)観点別評価を点数や%に変換し、重み付けを勘案しながら総合評定を算出する方法、または、(b)観点別評価のABCの組み合わせによって、総合評定へ変換する方法が採られている。このような変換ルールについては、(基本的な方針が教育委員会から示される例もあるとはいえ)決定権は各学校にあるので、それぞれの教科等の特性を踏まえつつ、カリキュラムに合った変換ルールを策定することが求められる。教師たちが捉える各目標の重要性と、実際に付けられる成績との間に乖離が生じているとすれば、総合評定を算出するルールを適切に設定し直すことが必

図 様々な評価方法



出典：西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化、2016年、83頁

論説 資質・能力の育成に向けた授業づくり3 一学びに向かう力、人間性等の指導と評価を軸に①—
資質・能力の育成と学習評価の充実

カリキュラム・マネジメントと音楽科の授業改善

音楽科の授業改善

志民一成

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
文化庁参事官（芸術文化担当）付教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

1 音楽科の学習の充実に向けて

音楽は古来より様々な学問と深く関わりながら存在してきており、また生活や社会と密着して発展してきた文化でもある。それゆえ音楽科の学習も様々な教科等との接点があり、これまでも教科等横断的な視点が小なり小なり意識されながら指導されてきたと言える。例えば、学校行事等との関連もその一例であろう。

一方、郷土の音楽等を扱う際に、地域の人材をゲストティーチャーとして迎えた授業も少なからず実施されてきている。今次学習指導要領の改訂において、小

学校音楽科の改訂の基本的な考え方に「音や音楽と自分との関わりを築いていくよう、生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実を図る」ことが盛り込まれた。このことを実現するためには、目標の柱書に示された「音楽的な見方・考え方」を働かせた学習を組み立てることが必要となる。「音楽的な見方・考え方」は「主体的・対話的で深い学び」の視点のうち、「深い学び」の視点からの授業改善においてキーワードとなるものであるが、『小学校教育学習指導要領（平成二九年告示）解説 音楽編』（以下、「解説」とする）では「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽

を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などに関連付けること」（傍線は筆者による）と解説している。さらに、解説では「音や音楽は、『自己のイメージや感情』、『生活や文化』などとの関わりにおいて、意味あるものとして存在している」と示している。これら「自己のイメージや感情、生活や文化」などに関連付けられることが、改訂の基本的な考え方に示された「生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実を図る」上で鍵になるものであることが分かる。

「自己のイメージや感情、生活や文化」

などと関連付ける上では、音楽科の授業の中だけでなく、他教科等の学びと結び付けたり、普段の生活や地域の文化に目を向けたりすることが重要な意味をもってくる。

2 カリキュラム・マネジメントの三つの側面と音楽科の授業改善

学習指導要領の総則において、カリキュラム・マネジメントの充実について次のように示されている。

各学校においては、①児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。（丸数字は筆者による）

前述のとおり、音楽科の授業の充実に向けては、このカリキュラム・マネジメント

の三つの側面のうち、①の教科等横断的な視点で他教科等の学びと結び付けたり、③の地域の教育資源を活用したりすることが期待される。確かに、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指すとき、地域の教育資源を生かしたり、他教科等とのつながりを意識したりして授業改善を図ることは大きな意味をもつと言える。

学習指導要領第2章第6節の第3 指導計画の作成と内容の取扱い2(1)エに、次のように示している。

児童が学校内及び公共施設などの学校外における音楽活動とのつながりを意識できるようにするなど、児童や学校、地域の実態に応じ、生活や社会の中の音や音楽と主体的に関わっていくことができよう配慮すること。

学校内における音楽活動としては、総合的な学習の時間や特別活動などにおいて、歌を歌ったり音楽を聴いたりすることが行われているであろう。また、学校外における音楽活動としては、子供が自分たちの演奏を披露することや、音楽家や地域の人々によるコンサートを鑑賞す

ることが行われている。学校内の活動で言えば、教科等横断的な視点が不可欠であるし、学校外の活動ならば人的又は物的な体制の確保が求められ、これらのカリキュラム・マネジメントの側面から充実を図っていくことが大切である。

しかし、教科等横断的な面を意識する一方で、音楽科の学習として深まりを欠いたり、学校外の音楽家やゲストティーチャーとの連携が不十分であるために、学習のねらいが十分に達成されていないかといった懸念もある。その点では、カリキュラム・マネジメントの②の側面から改善を図っていくことが不可欠であり、特に、前述した「音楽的な見方・考え方」を働かせた学習となっているか、という「深い学び」の視点から授業改善を行っていくことが肝要である。音や音楽を「自己のイメージや感情、生活や文化」などと関連付けることで、子供にとって音や音楽を意味や価値をもったものとして実感すると共に、そういった音や音楽について学ぶ音楽科の授業の意義を子供自身が感じ取ることができるよう学習の充実を図ってきたい。

（したみ・かずなり）

クラウドの活用：プログラミングの体験

文部科学省初等中等教育局GIGA StuDX推進チーム

関連ページ
こちらから



はじめに

本号では、計画的な「プログラミングの体験」を紹介する。また、次ページでは、特設ウェブサイト「StuDX Style」の関連事例を掲載する。

計画的なプログラミングの体験

学習指導要領では、情報活用能力の育成を図るため、子供がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けるための学習活動を、各教科等の特質に応じて計画的に実施するよう示している。取材校では、一人一台端末の導入により、

計画的にプログラミングの体験を行いやすくなったという。

第二学年では、音楽科「音楽づくり」の時間に、ウェブブラウザ上のプログラミングソフト「Scratch」を用いて七つの音で自分のお気に入りの旋律をつくる学習活動をしていた。旋律をつくるためには、音に出して聴きながら試し、音符の命令ブロックに数値を入力する。入力する数値をいろいろと試し、音を鳴らしながらお気に入りの旋律を見付けていた子供の一人は、「授業で演奏した鍵盤ハーモニカ以外にも、いろいろな種類の楽器の音に変更でき、友達の旋律と聴き比べながら、自分の力で何度も音の組み合わせを試すことがで

きて楽しいです」と話してくれた

(写真1)。訪問日は、他の学年や特別支援学級でも、算数科や総合的な学習の時間等の様々な教科等でプログラミングを体験する学習活動に取り組んでいた(写真2、3)。クラウド上に保存された旋律づくりの続きを休み時間に楽しむ姿もあり、計画的にプログラミングの体験を行うことで、子供が日常的にプログラミングするようになった様子が伺えた。

おわりに

取材校では、プログラミング教育に関する年間指導計画とその実践を校内で共有する工夫を行っていた。組織的な取組により、ICTに苦手意識を感じる教師も挑戦できていた姿が印象的だった。

取材協力：相模原市立南大野小学校



写真1 音楽科の授業で旋律をつくる学習活動の様子



写真2 第6学年の子供が算数科の時間にプログラミングを体験する様子



写真3 第1学年の子供が各教科等とは別の時間にプログラミングの体験をする様子

中学校教師による

小学校の学習の遠隔支援

教師と子供がつながる

■校種・学年：小学校以上

【ポイント】オンラインで小中連携を図り、子供の学びを深めることができる授業の形です。



■活用の概要：

プログラミングソフトを使って、初めてプログラミング学習を行うに当たり、専門知識や技能を有する近隣中学校の技術・家庭科の教師とウェブ会議でつなぎ、ソフトの使い方やプログラミングの手順について、遠隔支援を行った。

■準備するもの：

- ・ウェブ会議ソフト
- ・プログラミングソフト(ブラウザ上で無償利用可能)

近隣の中学校教師
との連携



ウェブ会議による
遠隔支援



・効率的な学習指導
・興味関心の向上



中学校教師とは事前に指導計画を共有し、授業時間に合わせてウェブ会議に参加してもらった。大型ディスプレイの上にウェブ会議用のカメラを設置し、教室全体を俯瞰できるように準備した。



中学校教師が遠隔で一斉指導、学級担任は机間指導しながら個別支援。うまく役割分担を行うことで、45分の授業でほとんどの子供が自分のプログラムを組むことができた。

🗨️アドバイザーからのコメント

学習を進める中で出てきた疑問や考えを外部の専門家に直接聞くことができる場合は、とても貴重です。また、学習を通して学んだ成果を聞いてもらい、意見をもらうことも学びを深めることにつながります。普段は聞けない専門的な話を聞くことで、子供の興味関心が高まり探究的な学びを展開することにもつながります。

※https://www.mext.go.jp/content/studxstyle_skillup_02-06.pdfより転載

【StuDX Styleについて】

文部科学省では、1人1台端末の利活用に関する情報を特設ウェブサイト「StuDX Style」にて発信しています。「GIGA」に「慣れる」「つながる」活用事例を多数掲載しておりますので、研修会等で紹介いただくなど、ぜひ御活用ください。



本記事は、出典を記載の上、研修等で転載・配布していただけます。

幼児教育

論説

■特集…友達と一緒に活動する楽しさを味わう

多様な体験を通して 育まれる幼児の協同性

聖徳大学教授

河合優子



令和五年二月に「学びや生活の基盤を

つくる幼児教育と小学校教育の接続について」幼保小の協働による架け橋期の教育の充実」が取りまとめられ、子供に関わる大人が立場を越えて連携し、架け橋期の教育の充実を図っていくことが示された。幼児教育の日々の実践を改めて見つめ、小学校教員をはじめ関係者に具体的な場面を通してその内容や方法などを伝えていくことが求められている。

幼稚園は集団の教育力を生かす場である。集団の生活の中で、幼児たちが互いに影響し合うことを通して、一人一人の発達が促されていく。そのため、集団あ

りきではなく、幼児が他者と出会い集団になっていく過程を大切にし、一人一人の発達の特性を生かした集団をつくり出すことを重視している。そうした集団の中で、幼児が友達と一緒に活動する楽しさを積み重ねていくことが、小学校以降の生活や学習の基盤となる。

本稿では、幼稚園における「友達と一緒に活動する楽しさを味わう」ことについて「幼稚園教育要領解説」の記述を参照しながら、幼児の発達に沿って述べていく。

1 五歳児後半の「協同性」を支えるものを考える

まず、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「協同性」を改めて検討する。

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

「協同性」の記述には、他者との関係

の深まり、周囲の環境との関係の深まり、思考力等の深まりなど多面的な発達が見込まれており、小学校教育につながるべく「核」となるものであると考えられる。解説に掲載されている例示を基に、どのような体験が五歳児後半の「協同性」を支えているのかを考えてみたい。

修了式が間近になり、幼児から年下の幼児やお世話になった人を招いて楽しい会をしたいという意見が出されると、学級の皆で活動するよい機会なので教師も積極的に参加して、どんな会にするか皆で相談したりする。幼児は、それまでの誕生会などの体験を思い出しながら、いつでも何をしようか、来てくれた人が喜んでくれるために飾り付けやお土産はどうするか、会のお知らせをどうするか、会の進行はどう分担するかなど、必要なことを教師や友達と話し合い、互いの得意なことを生かすなど工夫して楽しみながら進め、やり遂げた充実感を味わうことができるだろう。

○人との関わり

思い付いたことを気軽に話し合い、そのことに関心を寄せて自分事として捉

え、考え合っていく学級の関係性が読み取れる。こうした関係性の基盤は、学級の皆と一緒に生活する中で育まれてきた安心感や信頼感である。同時に、好きな遊びを行う小さな集団の中で、十分に自分らしさを出し、ときにはぶつかりながら一緒に遊ぶことを楽しんできたという体験の積み重ねがある。

お世話になった人を招きたいという発想には、身近な人との関わりが豊かにあることが示唆されている。年下の幼児、担任以外の教師、事務や用務等の仕事をしている職員、さらに、保護者や地域の方にも思いを馳せることがあるだろう。

○多様な体験

互いの得意なことが生かされる背景には、一人一人が十分に自己発揮してその子供らしさやよさを認められ、その自信を基に様々なことに挑戦して体験が広がり、更に力を発揮するという循環がある。

そこでは、一人一人が夢中になって遊び、もっと面白くしたいと取り組んできたことが生きてくる。身近な遊具や用具、様々な素材に触れ、工夫して取り入れることや、運動的な遊びの中で十分に体を動かし力を発揮すること、自然との

関わりや当番活動をするなど様々な場面での多様な体験が重要である。

○目的に向かって取り組む充実感

好きな遊びの中で友達と思いを伝え合ったり試行錯誤したりしながら一緒に活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わう体験が重要である。

また、毎月の誕生会や運動会等行事への参加、とりわけ発達に応じて参画していく体験も大切にしたい。例えば、好きな遊びの中で楽しんでいるものを誕生会で披露したり司会を行ったりする、運動会で行いたい種目を教師や学級の友達と考えたり、リズムの踊りの一部をグループの友達と一緒につくって踊ったりするなどは多くの園で行われているであろう。

共通の体験と好きな遊びの体験が往還することで、幼児の体験は深まり、先行体験を自在に使うようになっていく。例示のような状況の中で「いつ、どこで、誰を対象にするのか、何が必要で役割分担はどうするか」などを自発的に考えていく姿として現れてくる。